

ギリシア・ローマ劇場の客席の平面形態について

渡邊 道治*

On the *cavea* Plan of Greek and Roman Theaters by Michiharu WATANABE

(Received: October 2010, Accepted: February 2011)

Abstract

In this paper, it is proposed a new classification of *cavea* plan of Greek and Roman theaters through observing 248 examples in situ. Based on the new classification, the following three points are draw out ; (1)the *cavea* plan shows various form, and therefore a traditional classification derived from Vitruvian description would be no longer valid for comprehending the architectural development of the theaters, (2)the most popular *cavea* type in Greek and Hellenistic world has a form from a segment of one circle around the orchestra, an over-semicircle formed *cavea* and the unparallelled analemmata with the stage building, (3)in the typical *cavea* type of Roman period, whereas *ima cavea* has a semicircle or a little smaller than semicircle plan, *media* and *summa cavea* form a little larger than semicircle over parodoi, and stage building and *cavea* are incorporated in one whole building. The semicircle plan of *cavea* was already used in 2nd c.B.C. and was established as one type until the Augustan period in Italy, and after 1st. c., especially after later half the century, the plan is found out around the ancient Mediterranean world.

[1] 研究の目的

現代劇場建築の原型をなす古代ギリシア、ローマ時代の劇場は今までのところ地中海世界でおよそ一千にのぼる数が確認されている。この時期の劇場はオルケストラ、舞台、客席の3つが基本的な建築の構成要素であり(図1)、それらの配置によって全体の平面形が作りだされる。この劇場建築の平面は建築的に見ればそれほど複雑ではないために、これまで大雑把に分類されてきた。すなわち、ギリシア型、ローマ型、ガッロ・ローマン型の3つの型である。この分類はローマ時代の現存する唯一の建築書を記述したウィトルウィウスのギリシア型とローマ型の分類、それにガリアを中心に見られる特異な平面に名付けたガッロ・ローマン型からなる¹⁾。いずれも舞台、オルケストラ、客席の3つの基本要素の相互の配置関係から平面を分類したものである。

本稿では、従来のこうした単純な平面形式の分類を

再検討するための最初の段階として以下の2点を明らかにすることを目的とする。平面形式の分類をより平明に理解しやすいように、まず客席の平面形式について新たな分類の提案を行う(図2)。次に、そこで分類された客席平面のそれぞれのタイプが地域的、時代的にどのような特徴をもっているかを概観する。

従来の分類に見えるウィトルウィウスの記述するギリシア型では舞台建築と客席は建築としては分離して立ち、客席は半円より大きな扇形をなし、オルケストラは円形である。さらにオルケストラ周りの客席は2つの異なる曲率の円弧を組み合わせてつくられている。これに対し、ローマ型は舞台建築と客席は構造的に一体化しており、客席全体は半円形平面をなし、オルケストラも半円であり、その周りの客席も半円である。ウィトルウィウスは言及していないが、ガッロ・ローマン型は劇場としてもあるいは円形闘技場としても使えることを前提したもので、客席と舞台は分離して立ち、客席は半円の場合もあるものの、一般的には半円より大きく、オルケストラは様々な平面をなし、ローマ型よりも幅広い²⁾。ここで、

*産業工学部建築学科教授

本稿で述べる「オルケストラ周りの客席」の平面あるいは形とは、客席の中で最下部のオルケストラ囲む部分のみが作り出す形を指しており、客席の平面あるいは形とはオルケストラを囲む部分、analemmata、客席の最も外側つまり最上部によって作りだされる平面形をさす。

現存する実際の劇場はこうした3つの単純な分類に当然すべて当てはまるわけではなく、むしろ相互の特徴を組み合わせたような事例も数多く見受けられる。また、この分類にほとんど適合しない事例もいくつも見いだせる。つまり、ウィトルウィウスの記述にもとづくギリシア型とローマ型、それに特異な平面としてのガッロ・ローマン型の3つの平面に分類されたままで放置されているのが現状なのである³⁾。その背景にはいくつかの理由が考えられる。ひとつには劇場の平面が舞台、オルケストラ、客席の基本的にわずか3つの建築要素から構成されているにもかかわらず、実際には様々な形態とその組み合わせからなり意外と複雑な形態をなしているからである。さらに、平面形式の分類と劇場建築の建築的な発展をより深く関係づけて論じようとする観点が比較的希薄であったことがあげられる。

オルケストラ周りの客席の形

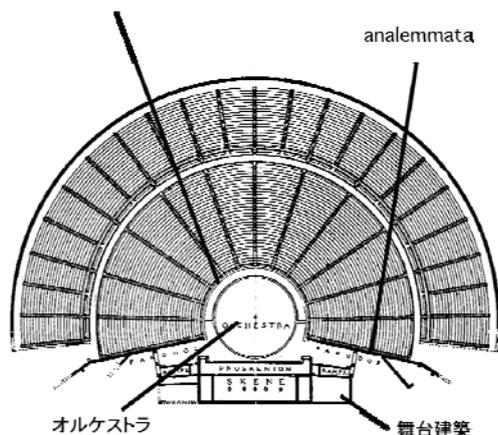


図1 エピダウロス劇場平面を例とした各部の名称

[2] 資料と研究の方法

今回の分析では、オルケストラ周りの客席の形態、舞台の位置、analemmata (客席両端部に配置される分厚い壁) と舞台および客席との関係が図面上で判明する場合のみを研究対象とした。その結果、分析対象として得られた資料は248例であった⁴⁾。地域的に見ると北アフリカに22例、イタリアより西側ヨーロッパに33例、イタリアに69例、イタリアより東側でギリシアを除くヨーロッパに10例、ギリシアに45例、トルコに46例、トルコ以東の地に23例であった。分析対象資料の地域的な分布から見れば、イタリア、ギリシア、小アジアに多く、イ

タリア以東でギリシアを除くヨーロッパと北アフリカにやや少ない傾向にある。しかし、現存する劇場の地域的な分布状況と比較するとほぼ類似の傾向にある⁵⁾。

次に建設年代から分析対象資料の分布を概観すると、客席の平面が判明する248例の中で2例が建設時期不明であった。紀元前6世紀に1例、紀元前5世紀に2例、紀元前4世紀に15例、紀元前3世紀と紀元前2世紀に25例ずつ、紀元前1世紀に24例、1世紀に66例、2世紀に52例、3世紀に21例であった。その他にヘレニズム時代に建設されたものが5例、ローマ帝政期に建設されたものが8例、ローマ時代に建設されたものが1例であった。客席平面が判明している劇場の建設時期による分布状況を見ると、現存する劇場の建設時期による分布と比較し若干2世紀の事例が少ない傾向にある⁶⁾。

[3] 客席平面の形態分類について

劇場平面の形態についての分類は、前述したように、舞台建築、オルケストラ、客席の相互の位置関係によって3つの型に分けられてきた。それに対し、劇場の平面の変化を辿る上で、まずは本稿では客席部分のみの平面の分類を以下のような基準にもとづく分類からはじめることとする。

劇場の客席の平面を決定づけている要素から見ると、平面形態の分類の基準はオルケストラ周りの客席の形、オルケストラの形、analemmataの舞台建築に対する関係の3点から行う必要がある(図1、2)。オルケストラまわりの客席の円弧の形は、単純なひとつの曲率の円弧からなるのか、あるいは複数の異なる曲率の円弧の組み合わせによるのかを区分した。オルケストラの平面形は半円、半円より若干大きい、半円よりも大きい場合の3つに区分した。最期にanalemmataと舞台建築との関係では両者が平行の位置にあるのか、あるいは斜めで平行でない位置にあるのかの区分を行った。さらに分類に関するこの3つの基準に付加的に密接に関連するパロドイの位置も考慮に入れた(図2中の矢印が客席へのアクセスを示す)。

その結果、この3つの要素の組み合わせによって現存する遺構のみを対象とすると、劇場の客席の平面形は図2のように分類され、12種類となった。ここで客席の平面形を大きく分ける上で重要な意味を持つ要素は、オルケストラの平面形とオルケストラ周りの客席の形であり、大きく4つのグループに分かれる。すなわち、客席全体が半円をなす場合、オルケストラは半円よりも若干大きく、オルケストラ周りの客席が半円ではなく半円よりも若干大きい小さい場合、オルケストラ周りの客席がひとつの半径からなる半円より大きな円弧をなす場合、オ

ルケストラ周りの客席が複数の半径の円弧の組み合わせからなり、半円より大きな円弧をなす場合である。以下、この4つの場合に従って結果を報告することとする。

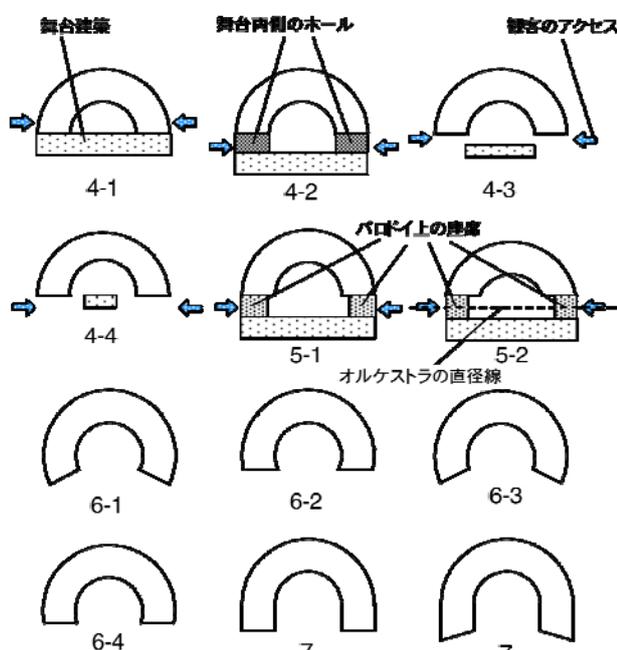


図2 客席平面のタイプ分け (記号は文章の見出し番号に対応)

[4] 客席がほぼ半円形平面をなす場合

ほぼ半円形の平面の客席では、客席の *analemmata* は必然的に舞台建築に対して平行となる。その場合、客席の平面が半円をなす程度により以下の2つのタイプに分けられる。ひとつは客席が完全な半円形をなす平面である

(図2の4-1から4-4)。もうひとつは、オルケストラが半円よりもやや大きくなり、オルケストラ周りの客席が半円もしくは半円よりやや小さく、かつ左右のパロイ上部にのる部分の客席が半円よりも張り出す平面である

(図2の5-1と5-2)。つまり客席の平面が完全な半円であることを優先したのか、厳密に半円であることにこだわらず半円に近い平面をなしているかの相違である。後者については次項の[5]で扱う。

前者の平面、すなわちオルケストラは半円で、その周りの客席の最下部近くは半円より小さく、パロイの高さから上の部分が完全な半円形をなす場合は248例中の47例であり、全体の約2割弱であった。この場合、客席を完全な半円形になすことが最優先されているが、パロイや舞台の配置の仕方から以下の(4-1)から(4-4)までの4つの平面が存在する(図2の4-1から4-4)。

(4-1) 舞台と客席は一体化し、通路が客席の下に造られ、客席とオルケストラは半円をなす場合(図2の4-1, 3)。

この平面型に属する場合は今回29例確認でき、客席が半円をなす場合の約6割強を占め、圧倒的に多い。この平面は、以下の[5]の項で述べる平面形とともに、従来のローマ型劇場に分類されてきた平面形の典型例である。

この平面をなす劇場を地域的にみると29例の中で、イタリア14例、アルジェリア、チュニジア、スペインに3例ずつ、フランスに2例、オーストリア、クロアチア、マケドニア、ギリシアに1例ずつであった。この結果から、まずイタリアよりも西側の地中海世界に集中していることが明らかとなった。次にイタリアに約半数が集まり圧倒的に多いこと、北アフリカに比較的多いことがあげられる。

建設年代からこの平面形が用いられた劇場について見ると、アウグストゥス時代より前の紀元前1世紀にイタリアに5例、スペインに2例、アルジェリアに1例が造られている。アウグストゥス時代になるとイタリアに5例、フランスに1例が、アウグストゥス時代以降の1世紀にはイタリアに2例、スペインに1例であった。2世紀以降ではイタリアに2例、フランスとオーストリアに1例ずつ、アルジェリアに2例、チュニジアに1例であった。つまり、紀元前1世紀前半のトスクムや同世紀中頃のおそらくローマのポンペイウス劇場など、イタリアの地でこの平面形式が生み出された可能性が高く、ほとんどが1世紀までに西地中海世界全体に広がっていたと見なせる。この平面形式で重要な点は客席の平面形を完全な半円にしようとする意思とともに、客席の下にパロイを作り出せる構法、すなわちコンクリートによるヴォールト構法をとりいれるという技術的な背景を必要としている。この点についてはさらなる検討が必要であり、本稿では言及しないこととする。

(4-2) 舞台と客席は一体化し、舞台両側のホール状の部屋からオルケストラへアクセスし、客席は半円で、オルケストラは半円になるとは限らない場合(図2の4-2, 4)。

この平面形に対応する事例は今回の分析でイタリアに1例、フランスに2例、ブルガリア、ギリシア、トルコ、キプロスに1例ずつ、総数で7例のみであった。地域的には地中海全域に広がっているが、少数かつ散発的であることから客席の平面形式としてはきわめて特異であったことが明らかとなった。また、この平面形式が北アフリカに存在しないことも客席の平面形式としての特徴のひとつといえる。

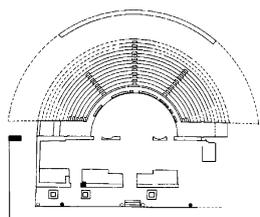
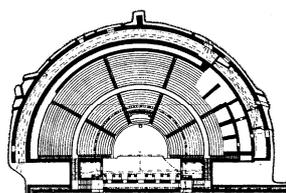


図3 トスクルムの劇場

図4 ペルガモンのアスクレ
ピウス神域の劇場

さらに7例の建設年代を見ると、1、2、3世紀にそれぞれ2例ずつ、ローマ帝政期に1例であった。最初に出現したと見られるのが1世紀のオータンやアッシジの劇場であり、その他の平面形式に比較するとややその出現が遅い。また特に建設時期の偏りは見られない。

(4-3) 舞台と客席は必ずしも構造的に一体化しているとは限らず、*analemmata* 沿いの出入り口よりオルケストラへアクセスし、客席は半円で、オルケストラは半円より少し大きくなる場合 (図2の4-3, 5)。

この平面形をなす客席を備えているのはアルバニアに2例、イタリア、ギリシア、イスラエルに1例ずつの合計5例であった。イタリアの事例はギリシア植民都市であるメタポント Metaponto であることから、いずれもギリシア・ヘレニズム文化の影響下にあった都市で造られている。また、その建設年代が判明している4例はいずれも紀元前3世紀であり、ヘレニズム時代に造られている。この4例では半円形の客席をなし、舞台は *analemmata* に平行に客席から若干離れて配置されており、舞台と客席が建築物として一体化されていない。

この中の3例、つまりメタポント、ニカイア Nikaia、エマサ Emmatha の劇場では客席にまったく階段状通路がないか、あるいは規則的な放射状の階段通路がなく、以下の(d)で述べる型の客席に類似している。一方で、ネア・プレウロン Nea Pleuron のように敷地の制約から *analemmata* を舞台に平行に造らざるを得なかった特殊な背景も見いだせる。つまりこの平面形の客席は事例数としてはきわめて少数で、ヘレニズム時代に作られ、規則的な放射状の階段通路を備えていない場合が多い。

(4-4) 客席とオルケストラは半円で、舞台はかなり小さく、その長さはオルケストラ直径よりも短い場合 (図2の4-4, 6)。

これらにはいずれにも共通する点がいくつか見いだせる。まず、客席は完全な半円形をなしているうえに、そこには放射状に配置されるべき階段状の通路はまったく

ない。さらに規模的にもそれほど大きくなく、舞台建築はきわめて小さく、時にはそれさえ存在していない。したがって、舞台そのものがその役割を果たしているとは見なしにくく、劇場の建築としての完成度から見ると不十分な状態といえる。また、観客は座席までアクセスする階段状通路がないため、座席を通路代わりにそのまま使う必要がある。次に、この平面をなす事例はガビイ Gabii、プラエネステ Praeneste、イグヴィウム Iguvium、イウヴァヌム Iuvanum の4都市においてのみで、いずれも中部イタリアに位置している。さらにその建設年代も紀元前2世紀が3例、紀元前1世紀が1例であり、共和政後期にすべて属する。これらのことから、この平面形は従来のローマ型と称される劇場の客席が造り出される以前のイタリアにすでに存在していたひとつのタイプであり、その後のローマ型劇場の平面との関連性を探る必要性がある。

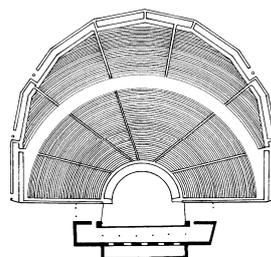


図5 メタポントの劇場

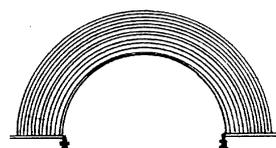


図6 ガビイの劇場

[5] オルケストラは半円より大きく、パロドイの高さより低い位置の客席は半円もしくは半円より小さく、パロドイの高さより高い位置の客席は半円より大きい場合

この平面形式に当てはまるものが82例確認でき、客席の平面が判明する現存劇場の約1/3を占め、客席平面型の中で最もその割合が高い。この平面形は従来のローマ型劇場の客席の典型例とも見られてきたものである。しかし、より厳密に見て行くと、オルケストラ周りの客席平面に完全な半円形を求めるとどうかで以下の2つの平面型に分かれる (図2の5-1と5-2)。

(5-1) オルケストラ周りの客席が完全な半円をなし、その両端部にパロドイが配置され、パロドイの高さより高い位置の客席が半円部から連続して張り出し、結果としてその部分の客席は若干馬蹄形気味の平面となる場合 (図2の5-1, 7)。

この客席平面は47例確認でき、今回の分析で12に分類した客席平面型の中で最も多くの事例が当てはまる。それを地域別見ると、イタリアにその約4割強に相当す

る20例が見られ、北アフリカに7例、イタリアより西側ヨーロッパに7例、イタリアより東側ヨーロッパに4例（その中の3例はギリシア）、トルコ以東の地域に9例であった（その中でトルコには1例のみ）。つまり、地中海全域にわたって広く分布していることが今回確認できた。また、地域的な偏りという観点から見ると確かにイタリアに集中する傾向にある。しかしながら、イタリア以外で見ると、西地中海と東地中海世界でとりわけどちらかに偏って建設された傾向は見られない。ただし、現存遺構が極めて多く残るトルコにこの平面形が少ない事は特筆すべきことである。

この客席平面形の建設時期についてみると、当初はほとんどイタリアで建設されていたことが明白となった。イタリアでは紀元前1世紀にすでに5例が確認でき、13例は1世紀に建設されている。また、イタリアにおいても最古の事例である紀元前1世紀前半のポンペイのオデイオンやジョイオザ・イオニカ Gioiosa Ionica の劇場などを含め、全20例の中の半数以上に当たる12例はアウグストゥス時代までに建設されている。つまりこの平面形式はイタリアではアウグストゥス時代までには一般的なものとなっていた。

これに対し、イタリア以外の地で見ると1世紀に11例、2世紀に12例、3世紀に1例で、この平面形式が登場するのは1世紀以降であった。地域的にみてもスペイン、フランス、チュニジア、クロアチア、ギリシア、ヨルダンと地中海全域で1世紀にはこの平面が出現している。ただし、すでにイタリアでこの平面形式が一般化していたアウグストゥス時代から1世紀前半までの時期に限定するとその数はきわめて限定され、リビアやクロアチア、そしておそらく南フランスの劇場に見られるのみである。このことから、この平面形式はイタリアではすでにアウグストゥス時代までに一般化し、それが地中海全域へ広がりを見せるのは1世紀後半以降と推測される。

(5-2) 客席両端部のパロドイの中心線がオルケストラの円の直径と一致する場合。この場合、パロドイにはある程度の幅が必要であるから必然的にオルケストラ周りの客席は半円より若干小さな円弧をなす一方、パロドイの高さより高い位置の客席部分は半円より若干大きくなる(図2の5-2, 8)。

この平面形をもつ事例は248例の中34例を占め、事例数としてはかなり多い型に属する。地域的な分布で見るとひとつの特徴が浮かび上がる。すなわち、イタリアとイタリア以西のヨーロッパ都市と北アフリカ都市にこの平面形は集中し、イタリア以東の地にはきわめて少数

が見いせるのみであった。その分布状況を見るとイタリアに13例、フランスとスペインに11例、アルジェリアとチュニジアに4例となり、その合計は全34例の中の8割強を占める。それに対し、イタリアより東の地中海地域ではギリシア、トルコ、イスラエル、シリア、ヨルダン、リビアに各1例が見られるのみであった。

次に建設年代から見ると、前述の(5-1)の平面形式の場合と同様の傾向を示していることが明らかとなった。すなわち、イタリアにおいて最初に出現し、それがアウグストゥス時代までに一般化し、1世紀後半以降になってその他の地域に用いられるようになった。ただし、イタリア以西のヨーロッパ都市ではアウグストゥス時代頃よりいくつの事例を見いだすことができる。

まず、イタリアでは紀元前2世紀にすでにラヌヴィウム Lanuvium など2例でこの平面形が使われ、アウグストゥス時代までに10例が確認でき、全13例の中の約3/4を占める。つまり、イタリアではアウグストゥス時代までに完全にひとつの平面形式として確立していた。一方、フランスのアルル Arles やスペインのロンダ Ronda ではアウグストゥス時代よりこの形式を用いており、他の地域に比べ比較的早い時期からイタリア以西の都市で使われていたことが明らかとなった。しかしながら、その他の地域では1世紀後半、あるいは2世紀以降にのみ見いだすことができる。

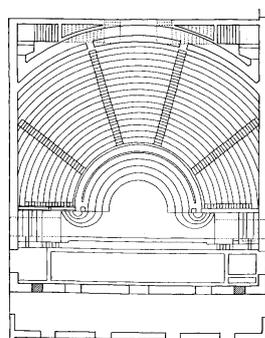


図7 ポンペイのオデイオン

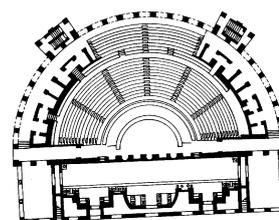


図8 フェレントの劇場

[6] 客席が半円より大きな円弧をなす場合

オルケストラ周りの客席の平面が半円形よりも大きな円弧をなす場合について見ると、その現存遺構は79例確認でき、これは本稿で資料として扱った249例の事例の約1/3を占める。しかし、その平面は本稿の当初に述べた客席平面の分類に関する3つの観点、すなわちオルケストラ周りの客席の形態、オルケストラの形、analemmata と舞台との関係から実際には以下の(6-1)から(6-4)までの4つのタイプに分けられ、その4つのタイプごとにかなり状況は異なる(図2の6-1から6-4)。

(6-1) オルケストラ周りの客席の円弧がひとつの円からなり、*analemmata* が舞台に対し斜めをなす、つまり客席は扇形をなす場合 (図2の6-1, 9)。

この平面の事例は41例あり、平面が判明する現存事例248例中の約1/6を占め、ギリシア・ローマ時代の劇場の客席の平面の12種類の中では最も多く用いられた平面形態のひとつである。また、これはビーバーなどが指摘するヘレニズム劇場の特徴であり、いわゆる従来のギリシア型に分類されているものである⁷⁾。

この41例を地域および建設年代から見ると、従来ギリシア型と分類されてきたように、いかにこの平面型がギリシア世界、より正確にはギリシア本土、エーゲ海の島々、小アジアのギリシアおよびヘレニズム文化の影響を強く受けてきた地域に集中して、かつ紀元前4世紀後半からヘレニズム時代にかけて建設された劇場に集中しているかが見て取れる。その一方で、同じギリシアやヘレニズム文化の影響を受けたはずのシチリアや南イタリアのいわゆるマーニャ・グラエキア地域にあまり見いだすことができないことが今回の分析で鮮明となった。

上記のような結果が導かれた状況を次に見ていきたい。分析対象となった41例を地域的に見ると、14例がギリシアに、17例がトルコに、4例がイタリアに、2例がアルバニアに、フランス、マケドニア、リビア、イラクにそれぞれ1例ずつ確認できた。つまり、41例中の2/5はトルコに、1/3はギリシアにあり、この2つの地域に全体の3/4が集中していることが明白となった。この中で、イタリアではシチリアのソルント Solunto、ティンダリ Tindari、エローロ Eoro の3つの都市と南イタリアのロークリ Locri の4都市にそれぞれ見いだしたが、いずれも紀元前4世紀に建設されている。これらの劇場の中で客席がひとつの曲率からなる半円より大きな扇形で、*analemmata* が舞台に対し斜めをなしていると確実に判断できるのはロークリとティンダリの劇場とのみであった。他の2つ、つまりソルントとエローロの劇場では発掘状況からその客席平面が確実にこの型に当てはまるとは断定できない。またティンダリの劇場の客席は、ここで分類した型に当てはまるものであるが、それはローマ帝政時代のものである。現状では半円より大きな円弧をなし、*analemmata* はオルケストラが端部に向かって最初は舞台に対し斜めであるが、途中から舞台に対し平行となっている。紀元前4世紀から紀元前3世紀に建設された時期のオルケストラ周りの客席の平面はローマ時代の改修の受けているため確定できていない。つまり、ギリシア植民都市が数多く作られ、その圧倒的な文化的影響

下にあったマーニャ・グラエキアの都市は、ギリシアや小アジアでヘレニズム時代までに最も一般的であった客席の平面形がギリシア、ヘレニズム時代に、当然のことながらローマ帝政期にほとんど使われていなかったことが明らかとなった。

最後にギリシア、小アジア、イタリア以外の地域、すなわちアルバニア、マケドニア、リビアで見いだせる4例の劇場はヘレニズム時代に建設されたものが2例、1-2世紀に建設されたものが2例できわめて散発的に見いだせる。いずれもギリシア・ヘレニズム文化の影響のもとに当初栄えた都市であった、

(6-2) オルケストラ周りの客席はひとつの円の一部からなり、しかも半円以上の円弧をなし、かつ *analemmata* が舞台に対して平行に配置された場合 (図2の6-2, 10)

この平面は、分かりやすく表現すればドーナツの一部を直径に平行な直線で切り取った形であり、今回の分析においてこの平面形に分類できた事例は17例であった。その地域的な分布を見るとギリシアに6例、フランスに5例と集中し、イギリス、アルバニア、トルコ、キプロス、ヨルダンの各国に1例ずつ散見される。この客席の平面形式は従来のガッロ・ローマン型に含まれるものであるが、ガッロ・ローマン型がすべてこの平面形式になっているわけではない。今回の分析に含まれるフランスの5例とイギリスの1例は明らかに従来のガッロ・ローマン型であった。しかし、この平面形式はガッロ・ローマン型以外にも使われていたことが明らかとなった。

次にギリシア以東の8例を見ると、2例は紀元前に、6例はローマ帝政期に建設されている。その8例はすべて神域に造られ、その中の3例はローマ帝政期に建設されたオデイオンであった。つまり紀元前であれ、ローマ帝政期であれ、ギリシア以東の地域でこの平面形式を客席に用いているのは神域に造られた劇場もしくはオデイオンに限定されていたことが今回明らかとなった。

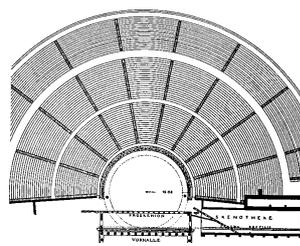


図9 メガロポリスの劇場

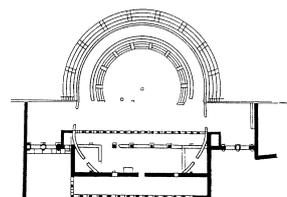


図10 ドーナの劇場

(6-3) オルケストラ周りの客席が異なる曲率の2つ以上

の円の円弧の組み合わせからなり、*analemmata* は舞台に対して斜めとなる場合 (図1、2の6-3)。

この平面に属するのは19例確認でき、まさしくウィトルウィウスがギリシア型劇場の客席として述べた平面形式である。そこでは客席の半円部分はオルケストラの描く円からなるが、半円を超える部分についてはオルケストラの直径を半径とする円弧から作られている。そして *analemmata* は舞台に対して斜めとなっている。

その事例を国別に見ると、13例はトルコに、4例はギリシアに、イタリア (シラクサー) とレバノン (パールベック) に1例ずつであった。このように、この平面形は全体の事例数の中ではそれほど多いわけではなく、さらにその大部分は小アジアに集中しているのである。建設年代を見ると、地域によって全く異なる状況を示している。ギリシアの事例は、建設年代不明の1例を除けば、すべて紀元前4〜3世紀に建設されており、その最古の事例はアエガエに紀元前4世紀後半に建設されたものである。一方多くの事例を見いだせる小アジアでは、プリエネの紀元前300年頃建設の劇場に最古の事例を見いだした後、紀元前1世紀までに8例が建設され、2世紀になって4例が建設されている。しかもこの4例はリキアとピシディア地方に限定されている。つまり、ウィトルウィウスがギリシア型と命名した劇場平面における客席の平面形態は実際にはほとんどが小アジアで紀元前3世紀以降に多く作られていたものであり、しかも紀元後では2世紀に小アジアの一部の地域に限定されて作られていたものであった。しかしながら、その最古の事例はギリシアにも小アジアにも見いだせ、どのような背景のもとにどこでこの平面型が作られたかは今後の課題である。

(6-4) 曲率の異なる円弧を2つ以上組み合わせた円弧がオルケストラ周りの客席の平面をなし、さらに *analemmata* が舞台に対して平行をなす場合 (図2の6-4)。

これに属する事例はギリシアのスパルタ Sparta とクレタ島のリュットス Lyttus のわずか2例の劇場にすぎなかった。その中でも後者の劇場は現存しておらず、1586年に描かれた図面からその平面を知りうるのみである。その結果、スパルタの劇場は異なる曲率の円弧を組み合わせた円弧からなる客席で、*analemmata* は舞台に対して直線となる唯一の現存事例となる。

このスパルタの劇場は紀元前1世紀、あるいは後期ヘレニズム時代に建設され、現存する舞台は当初のものに代わってウェシパシアヌス時代に建設されたもので、3世紀には舞台全体がより前方に再度作られた。客席その

ものはおそらく後期ヘレニズム時代のものがそのまま使われ続けたと見られる。オルケストラ周りの客席が半円を超える部分からオルケストラの直径よりもずっと大きな直径による緩やかな円弧をなしている。このような事例がわずか1例ということは、オルケストラ周りの客席が異なる大きさの直径を組み合わせた円弧である一方、*analemmata* が舞台に対し平行となる客席平面がきわめて特殊なものであったことを如実に示すものである。

[7] オルケストラ周りの客席が半円をなし、そこから超えた部分がそのまま直線状に舞台側に伸び、結果として客席が馬蹄形平面をなす場合 (図2の7)

この平面をなす事例は34例見いだせ、今回の分析対象総数の約1/7を占める。その直線部分の長さはさまざまに特定の長さに集中しているわけではない。また、その34例の中の19例は *analemmata* が舞台に対して平行であるのに対し、15例は舞台に対して斜めとなっている。

馬蹄形をなす客席の平面型は劇場建築の歴史の中でもきわめて古くから使われており、古代の劇場の出发点ともいえるアテネのディオニソス劇場が紀元前325年頃石造客席となった時 (図11)、そして紀元前400年頃に作られたと見られるポセイデイオン (イスマイア Isthmia) の劇場でも見られる。このように紀元前4世紀から見いだせる馬蹄形平面の客席はギリシア・ヘレニズム時代とローマ帝政時代では *analemmata* の配置に関しては異なる傾向を見せている。

前述したように、客席がオルケストラ周りで馬蹄形をなし、かつ *analemmata* が舞台に対して斜めとなる15事例の中の13例では、すなわちそのほとんど場合の客席はギリシア・ヘレニズム時代に建設されたものであった (残りの2例は建設年代不明)。これら15例の劇場の分布を見るとギリシアに9例、小アジアに4例 (ピナラ、アッソス、トラレス、アンティオキア・エピダフィネス)、イタリアに2例 (ポンペイとヘラクレア・ミノア) 分布しており、いずれもギリシア・ヘレニズム文化の影響のもとで栄えた都市であった。逆に言えば、ローマ時代になって、馬蹄形平面でありながら、*analemmata* が舞台に対して斜めに配置される客席が建設されることはなかったことが実証された。

一方、オルケストラ周りの客席は馬蹄形ながら、舞台に対して *analemmata* が並行な19の事例を見てみると (図12)、その中の15例はローマ帝政時代、4例は紀元前4世紀から紀元前2世紀までの間に作られている。帝政期建設の15例は、トルコに6例、キプロス、シリア、リビアに2例ずつ、イスラエル、エジプトとイタリアに1例ずつであった。トルコ以東の地は当然ギリシア・ヘレニ

ズム文化にもとづく地域である上に、さらにリビアの 2 都市であるプトレmais Ptolemais とキレーネ Cyrene はどちらもギリシア・ヘレニズム文化の栄えた都市である。イタリアの 1 例はハドリアヌス別荘内の劇場である。すなわち、この 15 例の劇場が分布する都市はすべてギリシア・ヘレニズム文化、とりわけヘレニズム文化が繁栄した場所であった。つまり、ローマ時代になっても馬蹄形平面の客席で、analemmata は舞台に対して斜めとなる平面はギリシア・ヘレニズム文化の栄えた都市の劇場にほとんどが集中的に建設されたことが明らかとなった。

客席が馬蹄形をなし、かつ analemmata が舞台に対し平行な配置をなす事例の中で紀元前 4 世紀から紀元前 2 世紀に建設された 4 例はイアイタス Iaitas、セジェスタ Segesta、モルガンテイーン Morgantino、ピエトラアッボンダンテ Pietrabbondante、アイハヌーン Ai Khanoum のみであった。アイハヌーン⁸⁾を除けば、これらの都市はシチリアと南イタリアのみに限定され、いずれもイタリアのギリシア植民都市を通じてギリシア・ヘレニズム文化の影響下にあったことはすでに知られていることである。本稿でむしろ明らかとなった点は、馬蹄形平面の客席が紀元前 4 世紀という早い時期からギリシア・ヘレニズム文化の影響下の都市で使われていた中で、analemmata が舞台に対して平行な配置の手法がシチリアや南イタリアの地域にのみに紀元前という比較的早い時期に出現していたことである。

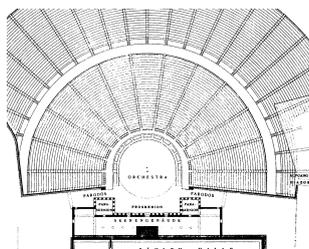


図 11 アテネのディオニソス劇場

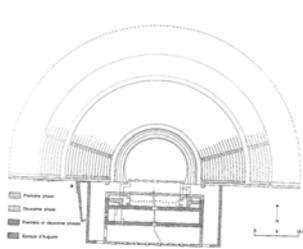


図 12 イアイタスの劇場

[8]まとめ

ギリシア・ローマ時代の地中海世界の劇場の平面の特徴や変遷を知るための基礎的な段階として劇場の客席の平面の分類を新たに提案し、それにもとづいた分類を分析可能な 248 例について行った。その結果、以下のような知見を得た。

- (1) 客席の平面形は様々であり、ウィトルウィウスの記述にもとづく単純な分類では劇場全体の変遷を把握することは困難である。
- (2) ギリシア・ヘレニズム世界で最も多く見いだせる客席の平面は、オルケストラ周りの円弧がひとつの円からな

り、客席は半円より大きく、analemmata は舞台に対し斜めとなっているものである。しかし、一方でこの形式は南イタリアやマーニャ・グラエキアのギリシア植民都市にはきわめて少ない。

(3) ローマ時代で最も一般的な客席平面は、パロドイの高さより低い位置では客席が半円もしくはそれよりも若干小さく、パロドイの高さより高い位置では半円より大きくなって舞台と一体化した形式である。劇場の客席が半円となる平面はイタリアにおいて紀元前 2 世紀から見受け、この形式はイタリアではアウグストゥス時代までにはすでに一般化し、その後、とりわけ 1 世紀後半以降地中海世界全体に広がった。

[注と参考文献]

- (1) Vitruvius, *De architectura*, V, 6-7. Rossetto, P. C. et al., *I teatri greci e romani*, vol.1, 1994, Roma, p.140 にガッロ・ローマン型の定義がなされている。
- (2) Vitruvius, *op. cit.*, V, 6-7.
- (3) 劇場を総合的に取り扱った以下の代表的文献では劇場の平面についての分類が確固として基準に従って行われているわけではない。Rossetto, P. C. et al. *op. cit.*, F.Sear, *Roman Theaters*, New York, 2006, M.Bieber, *The History of Greek and Roman Theater*, Princeton, 1961.
- (4) 今回の分析では上記の注(3)にあげた 3 つの文献を基本として劇場のリスタアップを行った。
- (5) 拙著、「ギリシア・ローマ時代の劇場建築について」、日本建築学会九州支部研究報告集、第 39 号、2000 年、pp.529-532
- (6) 同上
- (7) M. Bieber, *op. cit.*, p. 189
- (8) 紀元前 200 年頃建設されているが、その客席の形態は厳密には不確定であり、特に analemmata については現状ではどのように配置されていたのかははっきりしない。Rossetto, P. C. et al. *op. cit.*, p.211.

図版出典：

図 1, 9, 11, M. Bieber, *op. cit.*, Fig. 271, 276, 250 より／
図 2 筆者作成／図 3, 4, 5, 6, 8, 10, Rossetto, P. C. et al. *op. cit.*, vol.3, p.83, 400, vol.2, p.500, 466, 454, 200 より／図 7, 12, C. Courtois, *Le Bâtiment de scène des théâtres d'Italia et de Sicilie*, Louvain-la-Neuve, 1989, Fig. 56, 16 より。

謝辞

本研究は平成 22 年度科研費基盤研究(C)、課題番号 22560646 により研究費助成を受けた成果の一部です。ここに記して深謝申し上げます。